

一昨年、ある月刊雑誌の5月号に、東海大学医学部付属病院院長五島雄一郎氏の「音楽家の病歴にみる芸術作品への影響」という題で談話が載っていて、クラシック音楽に関して、あまり知識のない私も、興味深く読ませていただいた。

此の度、東北地質調査業協会の協会誌「大地」に当社へ投稿の御依頼があり、できるだけ技術関係のことということであったが、こと新しく発表するだけの特別なこともないので、その雑誌に語られている一端を紹介させていただくことにした。

五島雄一郎氏は学生時代からクラシック音楽にとりつかれて、医学の道に進むかわら余暇は、専ら音楽を聴くことを趣味としてきたそうである。

そのうちに音楽だけでなく、作曲家自身に興味をもつようになり、その作曲家がどんな状況の中で作曲したのだろうか、自然、作曲家の伝記を読みあさるようになったが、どの伝記を読んでも、医学的知識や医学に関心のない人が書いたものだけに、死因や病気の詳しい記載がなく、まして、

病気と作品との関連などを書いたものがなく、医学を志しているがために不満が残ったとっている。

そして、有名な作曲家がどんな病気で死んだのだろうか、また、その作品と病気との間に何か関連がなかったかという問題意識を持つようになったとっている。

昭和17年頃、ドイツのアドルフ・ブラウンという人が書いた「天才の疾患と運命」という本の中に、著名人の病気とその創作活動との間にその関連を求め、そこに一種の宿命が感ぜられる内容に、当時、医学部の学生だったがために、大変興味をもって読んだものだという。

最近になって、ディーター・ケルナという人の書いた「大音楽家の病歴」の翻訳が出版され病歴を調べることにより音楽家の作品に病気がどう影響するかと興味をもったともっている。

そして、最初に挙げた典型的な例はシューベルトでした。シューベルトのよく知られた交響曲の中にある「未完成交響曲」は、未完成に終わったために、こういう

題がつけられたのであるが、何故に未完成になったのだろうか。

彼はハンガリーのブタペストにいたペストロハンチ公爵の家へ娘のピアノの教師となっていたが、そこで近所の娘と肉体関係に落ち入り梅毒にかかって、数年後、梅毒性の皮膚炎が起って、頭の毛がみな抜け、カツラをかぶらなくてはならなくなり、入院を余儀なくされたそうである。その記録も残っているという。

その上、入院のために「そううつ」になってしまい、作曲能力がガタッと落ちたといっている。丁度、この時、作曲中だったのが、交響曲変ロ短調「未完成」で、未完成になったのも「そううつ病」が原因ではないかと想像されるといっている。

シューベルトは、1828年の11月に亡くなったそうであるが、その年は、「そう」と「うつ」が交互にきていて、交響曲第7番ハ長調は、この時の作品で、一時間という長時間の演奏で、しかも、同じメロディーが何回も何回も出てきているという。

これを医学的にみて、非常な「そう」的な状態にあったと判断したといっている。

人間は「そう」状態になると、ベラベラと話し始め、興奮して同じことを繰り返すので、この症状が同じメロディーが繰り返

えされる作曲上の技法にも表れているといっている。

また、この年には、1月から半年ぐらしかけて有名な歌曲「冬の旅」の連作を行っていて、全部で24曲あるが、明るい曲、暗い曲が入り交じっていて、よく知られているものの中には、明るい曲では「菩提樹」、非常に暗い曲では「辻音楽師」があり、このような格差から精神的に大きな変動があったことを、曲の内容が示しているといっている。クラシック音楽に造詣の深い方であれば、成程と頷かれるかも知れない。

この1例だけでも、病気と芸術作品は非常に関係が深いと考えざるを得ないといっている。音楽は、ただ黙って聴いていればいいといわれる方もおられるでしょうが、同じ作曲家によっても、どうして出来、不出来が多いのか、あるいは、感情の突出が違うのかと考えると、まさに興味は尽きないともいっている。

それ故、芸術作品に一番影響を与えた病気といえば、梅毒が第一に挙げられるという。今日では、梅毒は簡単に治すことのできる病気だから、それほど大きな問題にはならないが、当時は、梅毒になると治療方法がなかったので、殆んどの人が脳梅毒になり、脳梅毒が現れる数年前に著しい創作

欲の高進がみられたという。

例えば、哲学者のニーチェは、梅毒の末期病状が現れるまでの一年間で27冊の本を書き、自伝によれば、ペンを執ると泉がわき出るように文章をすらすらと書いたと書かれているとっている。しかも脳梅毒の症状が出たとたんに、創作力がストップして、何も書けなくなったとのこと。

小説家のモーパッサンも40歳そこそこでピストル自殺をするが、その前に「女の一生」など名作を書いているともっている。

音楽家の中で、最もひどく脳梅毒の病状が出たのが、フーゴ・ヴォルフという人で、シューベルトと共に、歌曲の巨匠といわれ、ロマン主義歌曲の新しい境地を開いたといわれた人だそうです。この人は、17歳で梅毒にかかったことが記録され、その歌曲の作曲ぶりをみると、1888年から91年まで、多くの詩人の作品に基づいて200曲以上の歌曲を作曲したという。95年から97年までにさらに30曲。最盛期には、実に二日に1曲のペースで作品を残していることになるという。これを五島雄一郎氏は、脳梅毒の病状が現れる前に、独特のインスピレーションがわいたからだといわずして、何と説明できましようかとしている。

そして、交響曲第9番で有名なベートー

ベンは、先天性梅毒だったそうです。顔の形など、完全にしし鼻で、ひたいが広く、先天性梅毒の特徴を示していて、このことは後に彼の頭がい骨を検討して明らかになったとっている。

いずれにしろ、何故そういう現象が起るかということについて、五島雄一郎氏は、梅毒はスピロヘーターという糸みたいな細菌が原因でなる病気で、これが全身のいろいろなところに病害を起し、そして、毒素が恐らく脳の皮質を刺激し、その結果、非常にいろいろなインスピレーションが増して、創作力が高まるのではないかとっている。

次に、脳に広範な病害が進むと、全くインスピレーションがわかなくなると、創作力もなくなり、精神的にも支離滅裂になってしまう。こんなことで、病気が進行する前の何年間、音楽に限らず、小説でも、哲学でも素晴らしい作品ができあがるのだという。

今世紀に入って、サルバルサンを含めて、ペニシリンなどの抗生物質が、梅毒を治療してしまうようになって、脳梅毒を見ようと思っても見られず、五島雄一郎氏自身、脳梅毒の患者を診たのは、15年ほど前の一例きりだとしている。そして、更に続け

て、このこと、すなわち、脳梅毒がなく
なって、素晴らしい芸術作品が生まれる土
壌が一つなくなったといっは少々短絡的
すぎるが、かといって否定しきれない要素
も持っているといっている。

五島雄一郎氏は、もう一つ、芸術作品に
大きな影響を与える病気として、「そうう
つ病」を挙げている。これは、「そう」と
「うつ」が交互にくる病気で、特に、芸術
家といわれる人の中に多くみられるという
ことである。「そう」状態では非常に創作
意欲が増し、「うつ」になると創作力が減
退するところに特徴があり、しかも「う
つ」の状態になると、自殺したくなるほど
で、実際自殺してしまった例は、日本の小
説家でも、芥川龍之介、太宰治、有島一郎、
川端康成と枚挙に事欠かないという。すな
わち、「うつ」になると創作力がガタッと
落ちるので、自分の作家としての生命が終
わったと短絡的に考えて、悲観して自殺し
てしまうという。

五島雄一郎氏の談話はまだ続いているが、
その談話を読んで書いている私自身今まで
考えてもみなかったことであり、そしてこ
のことからいわゆる昔の芸術家、すなわち、
良く知られている画家、書家および工芸家
等の作品が今もなお金科玉条として珍重さ
れ、手本とされているのを思う時、ふと、
それ等の芸術家達はと感慨にひたっている。

五島雄一郎氏の場合は、音楽を趣味とし
た医学者としての立場から、追い求めたの
で、それはよいとして、私をはじめ普通一
般の人びとにとっては、“知らないうちが
花”ではないけれど、折にふれて、良い音
楽を聴き、良い書画を観て、そして良い小
説を読んで、日常をたのしく過ごすのが一
番しあわせなのではないだろうか。筆を擱
くにあって、五島雄一郎氏にお断りなく
紹介したのをお詫びしつつ、このように考
えている次第である。

(東北地下工業㈱)

